

先端心臓血管病センター

7月までに1100人以上が受診

循環器領域の先端治療 活発に

信大病院

今年1月に設置、4月から外来診療を始めた信大医学部附属病院の「先端心臓血管病センター」（センター長 池田宇一 循環器内科教授）の受診者数が、7月末までに延べ1157人となった。循環器内科、心臓血管外科、小児科循環器領域の診療機能を集約化した結果、血管再生療法などの先端治療に加え、ペースメーカーの植え込みや血管狭窄に対するステント留置などの処置数が大幅に増え、外科手術件数の増加にも貢献している。池田センター長は「患者さんにとっても喜ばれている。スタッフのモチベーションが向上し、患者さんの全身をよく診ていこうという姿勢の徹底につながっている意義も大きい」と評価している。

センターは専用病床48床のほか、外来に診察室4室を設け、心臓血管外科が週3回初診を受け付けている。さらに、循環器内科と小児科は専門外来として▽セカンドオピニオン▽血管内科▽心房細動▽冠動脈スクリーニング▽高血圧▽ペースメーカー▽ICD▽心不全▽特殊ステント▽成人CHDの各外来を設置し、自己骨髄細胞移植による四肢の血管再生療法は、センター設置後はセンター外来を通じて血管外科が担当し、これまでに20例近くに達した。近く虚血性心疾患にも応用される予定だ。虚血性心疾患に対するカテーテル介入ベンションは7月までに137件と、昨年1年間の実績112件をはるかにしのぐ件数をこなしている。



センター病棟の入口サインが、先端医療に取り組みスタッフの誇りとモチベーション向上に一役

センター病棟の入口サインが、先端医療に取り組みスタッフの誇りとモチベーション向上に一役

心臓細動外来では、4月から新しい根治法として、カ尔特システムを使ったカテーテルアブレーションを5件施行。不整脈に対し、心房にカテーテルを挿入して異常回路をブロックする。開業医からの紹介が多く、良好な治療成績をあげている。また心不全外来では、心不全の原因を特定し、重症患者の入院治療やHCT（在宅酸素療法）に上をめざして昨年発足した「信州ライブデモンストラーション研究会」はこのほど、相澤病院で第2回研究会を開催した。写真は、国内循環器領域の第一線で活躍する豊橋ハートセンターの鈴木孝彦院長や湘南鎌倉総合病院の齋藤滋副院長らを「冠動脈形成術（PCI）」の術者として迎え、県内からは心臓外科医をはじめ、

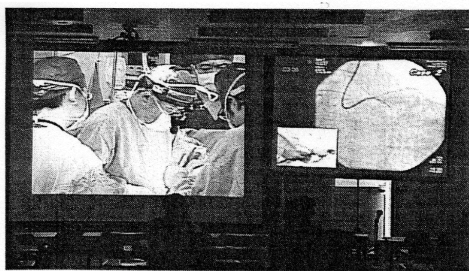
制も整う。国内最高レベルの循環器医療ができるようになる」と話している。

PCIやCABGの最新治療学ぶ

信州ライブデモ研究会

県内の心臓病治療の向上をめざして昨年発足した「信州ライブデモンストラーション研究会」はこのほど、相澤病院で第2回研究会を開催した。写真は、国内循環器領域の第一線で活躍する豊橋ハートセンターの鈴木孝彦院長や湘南鎌倉総合病院の齋藤滋副院長らを「冠動脈形成術（PCI）」の術者として迎え、県内からは心臓外科医をはじめ、

同院では10月に稼動する救命救急センターに、院内CCU3床を設置する。池田センター長は「救急患者に対応する体制も整う。国内最高レベルの循環器医療ができるようになる」と話している。



同研究会は、わが国の第一線で活躍する循環器内科医や心臓外科医による手術・治療をライブ中継し、別室に待機している医師やコメディカルらが最先端の治療方法について討論するもので、今回は相澤病院で行っている手術の様子を同院ヤマサホールに中継し、活発な意見交換を行った。術者は、内科領域は鈴木、齋藤両氏に加え、県内の循環器内科医4人。外科領域は藤松利浩相澤病院心臓病大動脈センター長が「冠動脈バイパス術（CABG）」と大動脈置換術、心房細動に対する「Eaze手術」、京都大学の米田正始心臓血管外科教授が「CABGと僧帽弁輪形成術」をそれぞれ行った。

筆頭代表世話人の藤松氏は「これだけのメンバーが集まったライブは全国的にも少ないのではないかと。患者のためになる高度な技術を巡ってすばらしい討論ができた」と総括している。